

015951-000-7

特16-647

年頭の法話

松田 甚左衛門 / 編

M25

ABC-1774

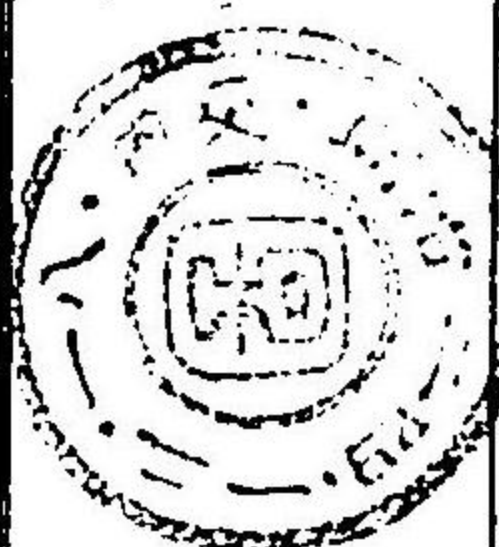




明治廿五年出版

華嚴乃法話

京都顯道書院藏版





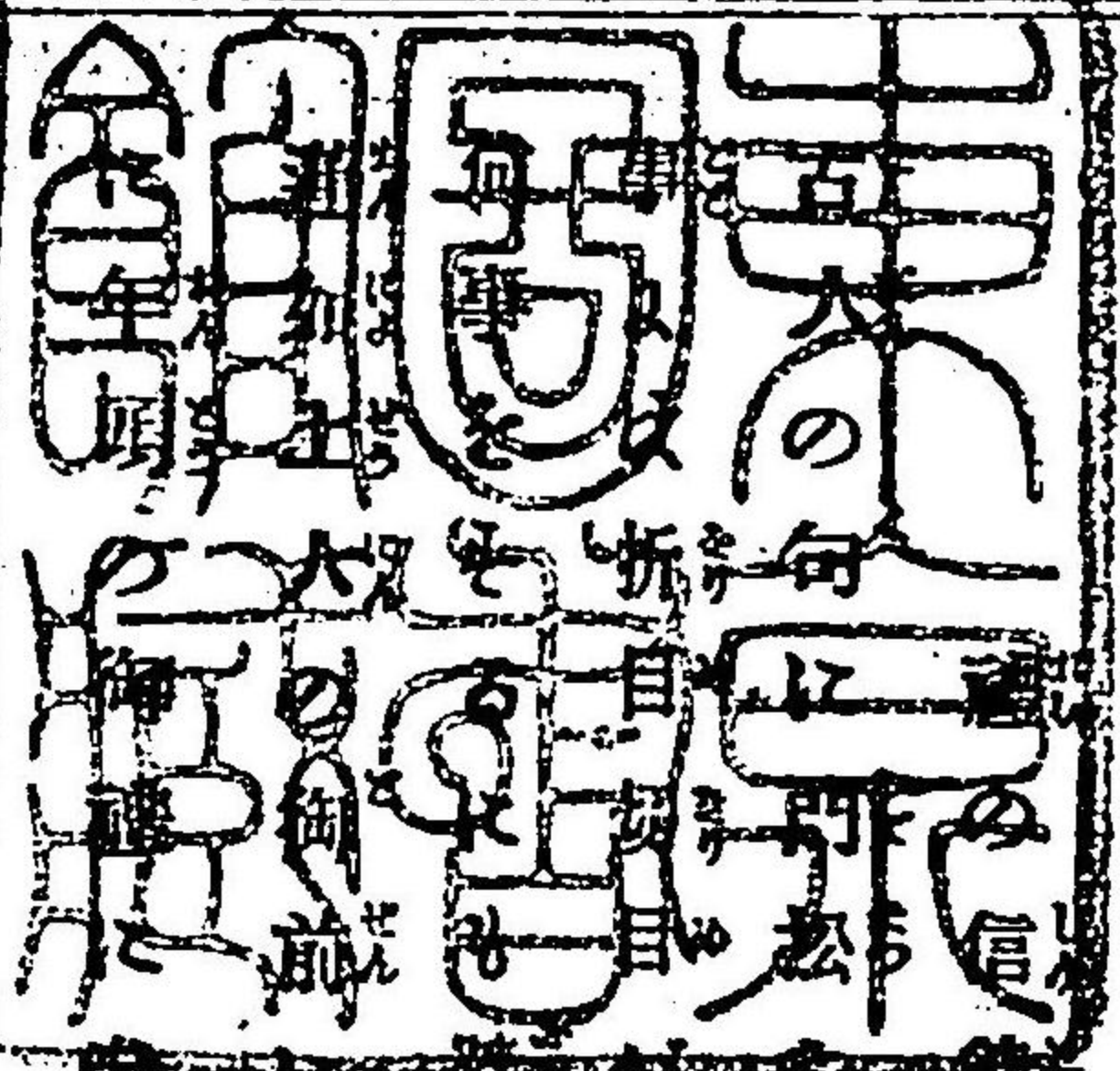
生れてい  
 死るなりけり  
 おしなむべし  
 釋迦を達磨も  
 猫も杓子も



正月一日御法話畧記

司教 七里恒順

記者云く本日は大善智識御道夜に付例月説教の  
 定日あれども今日に限り例月説教は休み年頭



同行に對して御法話ありたり  
 迷士の旅の一里塚と云はれましたが物  
 ありまそと大に心に改むる所がありて  
 留がありて宜いものでありまそ依て  
 勤修寺村の道德と云御弟子が正月一日  
 参りました時に 蓮如上人の仰には道德  
 先づ年を御尋にありました此の御心  
 ろを伺ふてみまそるに今日は元日と云ふて年始に参られ  
 た一年越たので御淨土参りの一里塚を一本通り過たから



門松や

迷土の旅乃

一里塚

一休



世乃中を

食てかきのそ

ねとをまて

只其あをわ

しゆら斗そ

一休





一里丈は御淨土の道中が近まりたのぢや夫に无由年頭の  
禮に心を取られ御恩の程を忘れては居らぬかと云ふ思召  
て有まそ夫故に次に道德念佛申さるべしと御報謝の御催  
促が有たので有る誠に有り難ひ御年頭の御言葉て有ます  
又十二月歳末の御禮に大勢御前に参りましたときは無  
益の歳末の禮かち歳末の禮には信心を取りて禮にせよと  
仰せが有ました此は大勢の事故其内には未だ信心を獲得  
せぬ人があるもので有ますから一年に歳末の有る如く一  
生の歳末は臨終と云ふ大三十日がある其の无常の節季の  
有るに無益の歳末の禮に走り回りに居ると大事の往生を  
仕損そる故に早く信心決定して死せば一定御淨土参りと  
云安堵の身にならねばいけぬそよと云ふ思召より如此仰

がありたに違ひはありません此外に蓮如上人は人の信  
を取りたるを聞くが何より嬉ひと仰せられ又時宜可然人  
あれども信あき人あは心をかくと仰せられた之れは世間  
に取て如何程氣のき、た工者の人でも法義のあき人には  
心を許して交際が出来ぬと云ふ思召でありませ又た片目  
つふれ腰を引く様を見悪い不体裁か人でも信心ある人は  
頼母子と仰せられました又た天王寺の土塔會と云ふ此邊  
の放生會祇園祭りの様か大勢人の集りしを御覽あされて  
は此の大勢の人が皆地獄へ落るとはあさけあひ事ぢやと  
御歎き遊ばされ其中に御門徒の面々信を得た同行は仕合  
せあとしやと御喜ひあされましたとある如此蓮如上人  
様の御思召の程を御話申すも外の事ではありません賢を



みてはひとしからん事を思へど云ひ 蓮如様は信を獲て  
喜ぶ人を見て彼の如く成り度と思へば成る、と仰せ候へ  
ば 蓮如様の通りに少しありども成りたひと云望みを起  
して此はねばならぬ御一同はどうか若や彼殿方の  
様にはとてもあられませんと云ふ自暴自棄の氣にありて  
はいけませんよ我身は如何程あるかでも頂く御慈悲が廣  
大お御名號ぢやから憤發すればあられるに違ひあひ 蓮  
如様の御思召と御覽し年頭に人に逢へば念佛せよと御勸  
め年末に同行が参れば信心を取れよと御教示遊ばさる其  
外年中人々に交際あさるにも聞も見るも想も信心にあら  
ざれば念佛と云ふより外は有はしません夫に付て最も肝  
要あふとは相續すると云ふことでありまそ農業でも植附

たありではいけません草取やら取揚やら手入の相續が肝  
要でありまそ又商業でも初めて事を起しときは次の然立  
つ様に盛大にあつても月日の立つに従て次第々に消て  
仕舞ふ様あとはつさらぬ最初は微弱でも年月を送りて  
相續すると後には大盛にあるものであるから御法義で  
も相續か最も肝要である也先第一に信心未定の人早く我  
氣の方に目を係けず唯本願の不思議一つて御助けと往生  
の大事を丸で御慈悲にうちまかせ其上からは御報謝の念  
佛懈怠なく相續して常に佛恩の廣大あることを喜び品行  
行状は固より家業渡世にも注意せねばあらん世間には農  
事の改良風俗の改良何の改良と改良々々と云て居るに信  
者ばかり改良せんでは開化の風潮に連れて御法義の進歩



と出来ませんから万事宜敷方に改良して御相續せねばあ  
りません心係てみれば随分御相續が出来ませから心係さ  
へあれば此の肝要を相續と云ふことは返て氣易く出来る  
ものでありませ一年の計畫は元日にありと云ふ古人の語  
もあるから此一日を始として御相續に懈怠のなき様に心  
係が肝要であります若手乗之其様を古語は醫弊ら一いと  
云ふか知らんが何にも昔とて今とて言葉に變りはありて  
も意味には少しもかわりは有ません經濟上の言葉で云へ  
ば豫算と云商買するも能くよく豫算を立てしませんと損  
失ばかりありませ年度の終は決算が肝要年度の始めは豫  
算が大事又衛生上の言葉で云ふてみれば豫防と云ふ「コレ  
ラ」病れ流行せぬ内から用心して床の下の掃除やら水道溝

さらへやら色々に豫防する此の道理で 蓮如上人は往生  
の死期もいまや來らんと油断なく其のかまへは候どの玉  
へば物事は先づ用心か第一て有りませす前から用心して置  
く程安氣あものは有ません依て念佛相續も一月一日の今  
日から豫算を立て懈怠せぬ様に豫防し今にも無常の大節  
季にありても安心して御浄土の元旦の待つ身にあらねば  
からぬ御一同に世間の人ば二十三年は日本第二の御維新  
と迄て云て居る年でありますから注意に注意を加へて御  
相續か肝要でありませさて畢りに臨んで一言申しますが  
當地方市中を一區畫として見ると中に少々は一人一戸  
で云へば幾分か退歩した人も有りませしよが大體に付て二  
十二年の決算をいれて見ませと先づ市内は御法義は大繁昌



と云て決算報告を致さねばなりません然らば利益の大か  
る商買を捨てるものは無ひ道理であるから猶一層御相續に  
御注意被下たらば今年二十三年度の決算は強々大繁昌と  
云ふ報告をきくには違はありませぬ如此云へばとて御互  
に走り回りて御勘めあさいと云ふので有ませぬ爛熳に  
火を付けるの間内は自然と明朗あるが如く我身々に心  
をば佛願の不思議に乗托し口に佛恩称名を相續して  
掟を大切に品行を正しく商買を勉強して世話敷中にも念佛  
を解怠せず日送りする様に我身の手元が明朗にあれば後  
には大悲攝取の光明の御照しかあるから彌々御法義は御  
繁昌するに違ひ有ませぬ能く御心得あり度存じませぬ

環 丘 宗 興

夫佛法の大義は唯心を以て本とぞ染心に依ては六道の生  
死を招き淨心に依ては十方の淨土に入るへし我等か今度  
の一大事と云は是あり然に聖道門の教は染心を止めて淨  
心を起し淨土門の法は染心をさしをきて淨心を用ゆ此を  
止めて彼を起すは智者も病めり此をさしをきて彼を用ゆ  
るは愚者も亦難からそ凡夫得生の心に於て善心をたのま  
す悪心をたのまされば善惡の心はあれどもあきか如し是  
を自力の心をさしをくと云自力の心を擱けば無疑無慮に  
して我胸大虚空のよく物をさへさるか如くあればよく彼  
の清淨の佛心を容れ用ふる事を得へし自力乃心の盡きぬ  
る處是を機の深信と云ひ佛心の満入したる處是を法の深  
信と名く信機已に成れば生死の道たへ信法已に成れば涅



樂門ひらく是を信心の人とは云あり凡そ凡夫生得の善惡  
の心と信前信後始終同じけれども其善惡をたのまそまて  
唯佛願の不思議をたのめは一身心中餘物なくた、佛心の  
とあり之を機法一体とも彼此三業不相捨離とも煩惱菩提  
体無二とも南無阿陀陀佛に身をまろめたるとも云へり若  
し介爾にも已か善を挟み已か惡を怯れて往生に若存若亡  
せは是れ憍慢の惡衆生あり邪見憍慢の者は佛心を信樂受  
持へること難きか中にあは難しと誠め玉へりされば南無  
阿彌陀佛又身をまろめられたる上は善心若し幸に起らば  
それに乘して彌よ念佛そへし廣大善根の念佛を行そるそ  
ら尙かたのむへからすまて餘善をたのまんや俱生の三  
毒そら尙は慚愧そべしまして分別の衆惡を好まんや是を

此機生得の善惡をたのますして唯大法の不思議をたのみ  
たる念佛行者と云なり善をあすとも是をたのまされは其  
心平かに惡をあそとも之をたのまされは其心邪からそ唯  
是柔軟心にして信心歡喜念々稱名常懺悔あり此世を渡ら  
んには吉事も煩はしく凶事もうるさく稱名念佛の營みそ  
ら尙は病めるほどの凡情の習ひ之を一世の勤苦と云され  
ども無始曠劫の苦患を思へは今日の一日のつとめは苦しとせ  
そまた信後永世の樂果を思へは今日の一日の苦みは却て是れ  
樂みあり是故に我等今生の一世は勤苦の間も樂み亦其中  
に在りかく心得つれば王法仁義のつとめ孝悌忠信の行を  
あさんも何の難きことあらんやされば惡人往生と教へて  
自然に善男善女を成就し善もほしからそ惡も恐れあしと



説てしらせく諸悪莫作の心地を得衆善奉行の實徳にか  
 かはしむ是れ開山大師肉身の如來妙教流通の手段仰き  
 ても尙ほ仰くへき者ありされば在家出家士農工商の本形  
 の儘にて本願の不思議を信しつれば煩惱即菩提にして終  
 日衣食を營み終日念佛す生死即涅槃にして終身生死の凡  
 夫終身生死の果を招かざる大益を得て其心安ければ  
 造次にも樂み頗沛にも樂む喫茶喫食語默作々妙境ならさ  
 ることあし仁者の山智者の水も豈之に外あらんやかゝる  
 樂をよく心よ存して而も逝川の嘆風樹の悲を忘れす一息繼  
 かされば千歳永く逝く命濁殺那にして依正滅亡し易けれ  
 ばゆめく油斷あく稱名念佛し玉へかし  
 いさしにの長のつとめも暇乞

娑婆のどあたもはいさよふきら

きみも來れ先つゆか九彌陀の國

錦さてまた、ち歸るらり



明治廿四年十月廿二日印刷  
全 年十一月八日出版

定價金壹圓

版權登錄

編輯者兼  
發行者

松田甚左衛門

京都市油小路通花屋町上ル  
西若松町三十四番戶

印刷者

瀬戸清次郎

大阪市西區鞆下通一丁目  
四十八番屋敷

發行所

京都市油小路  
通花屋町上ル

顯道書院